

東京大学総合研究博物館小石川分館

[建築博物教室](#) 第 13 回

**空間のアーキテクチャ——建築の記憶を環境の創造につなぐ**

日時：2017 年 6 月 3 日(土) 13:30- 15:00

講師：松本文夫（東京大学総合研究博物館 特任教授／建築学）

建築博物教室レポート

建築博物教室第 13 回は、松本文夫先生による講演で、「空間のアーキテクチャ——建築の記憶を環境の創造につなぐ」というタイトルで開催された。

小石川分館常設展『アーキテクニカ』の内容を切り口に、建物や建設としてのアーキテクチャではなく、構成原理、あるいは設計思想といった意味のアーキテクチャに光を当てた話が展開された。そのような非物象的な概念としてのアーキテクチャと空間をかけた建築事例を、小石川分館に模型が所蔵されている建物も含みながら解説がなされた。内容は、1.トキをこえる（時間、歴史、変化）、2.バショをつくる（空間、機能、概念）、3.モノをきわめる（構造、材料、環境）の 3 つのカテゴリーに各事例が分類され、その特徴が紹介された。今回は特に印象的だった建築例とその内容を振り返ってきたい。

1.トキをこえる（時間、歴史、変化）では、西洋建築と日本建築の比較から、建築の様式の発展には古典様式への回帰（西洋タイプ）と外来様式の前進（日本タイプ）があり、どちらも過去の建築様式を参考に新たな形式が生まれていることがわかった。また博物館施設のような時間が経つにつれて、物を置くために必要なスペースが増える建物の中には、国立西洋美術館などに見られるように成長する（増築が可能な）ように設計されたものがあると紹介された。そして小石川分館やインターメディアテクのような古い建物を組み替えることで新たな建物として生まれ変わるようなパターンがあった。

2.バショをつくる（空間、機能、概念）のカテゴリーでは、まず持ち主が自由に空間を使うユニバーサルスペースを実現するため、空間の原型を形にした例を見た（ファンズワーズ邸）。続けて廃校や古い邸宅などをリニューアルし、それまでとは異なる用途で利用される建物が紹介された（モバイルミュージアム他）。他にも、施主や作者の印象に残っている空間を切り取り、集約する建築（ハドリアヌス帝の別荘、空間コレクション）や、空間と空間につながりを持たせることで新たなバショを生み出す事例も紹介された（原広司自邸他）。

3.モノをきわめる（構造、材料、環境）では、使用目的や立地条件に合わせて、構造に工夫を凝らした建築が紹介された（木造三重塔、パンテオン）。そして限りのある空間を設定し、その中に様々な機能を詰め込んだ構造の例を見た。（増沢洵自邸、真壁伝承館展示ケース）次に一空間を個人のものとしてとらえるのではなく、複数の人が共有するパターンの建築例が紹介された（森山邸）。最後に環境を持続するための空間デザインの例として大槌文化ハウス等の例を見た。

以上の 3 つのカテゴリーでの事例を踏まえ、建築のデザインや構成ではなく、新たな環境創造のためのヒントがまとめられた。1つ目が、空間をデザインする時、過去と未来を

結ぶ時間のなかで、現在から問いかける重要性があるということだ。過去の建築デザインを模倣するのではなく、現在ある問題や理想を形にするために、過去の建築を検討すべきということだった。2つ目が、空間と機能とユーザの相互関係を柔軟に組み立てることだ。これからの建築には箱モノと呼ばれる建物ではなく、柔軟に場所づくりのできる空間をデザインすることが求められているようだ。3つ目は、小さな多数の「固有のもの」と広がりのある「共有の場」を共存させるということだ。事例を見る中で、個人の空間が共有空間につながりやすい建築が多く見られた。次世代の空間づくりには欠かせないポイントだと感じた。

毎回建築博物教室の恒例となっている展示は、『建築の記憶』と題された模型だった。3Dプリンターを用いて制作された模型で、一見プラスチック製のようにも見えたが材料は粉末状の樹脂と聞き、聴衆が驚いている様子が見られた。模型の構成は松本先生の記憶に残る建築の一部分を取り出し、コラージュするように組み合わせられていた。下から上に向かって年代が進む作りとなっており、時代や地域を代表する建築を300分の1スケールで見比べることが出来た。そのためか思っていたより小さいといったイメージと実際のサイズ感の違いに驚く声が聞かれた。

講演と展示模型を通して、建築は外から出来上がり、その内部空間は後付けされるものという考えが一新されたように感じた。建築というものが形になるには、内部の構成要素の核として、その建築に集ったり住んだりする人が、どのような時間や場所を求めているかを明確にすることが必要だと考えた。アーキテクチャ（建築）はその内部のアーキテクチャ（構成原理、設計思想）の集まりでできるものと考えれば、より小石川分館常設展の興味深さが増す建築博物教室だった。

(杉山佳恵／小石川分館学生ヴォランティア)